

永島先生と奇品植物

浜崎 大

奇品家雅見卷之上

【原文】

永島先生は東都四谷(とうとよつや)に住して享保の頃の人なり。天資(うまれえて)花木(うえき)を好み、奇品を愛す。その始め、花壇植木として区(しきり)を別(わけ)、地に種(うえ)しをのち器(うつは)に栽(う)えて壺木(つぼき)と呼ぶ。先生、始めて尾陽瀬戸(おわりせと)の陶工(すえものつくり)に命じて盆(ほとぎ)を制(つくら)せしむ。是を縁付(えんつき)と唱ふ。白鏝黒鏝鉢是なり。其の弁利、今において専ら用ゆる所なり。この頃より奇品大いにはやり、好人(すきびと)黨(くみ)を結相唱和し(むすびつきあい)て是を玩ぶ。其のかしらとして世の人永島先生と推し崇ぶ。今、栄える永島連これなり。珍品を玩ぶこと実に先生を中興の祖とす。集むる盆栽(はちうえ)千を以て算ふ。自ら培養(つちかひ)灌園(みづうち)に他事を廃して、老の将(まさ)に至らんとするをしらず。或る人詰(なじ)って曰く、先生、彼の兼好が徒然草を閲(み)ずや。先生笑ひ答へて曰く、資朝卿(すけともきょう)の雨舎(あまやどり)して捨てたまひしは、今、我が徒(と)の玩ぶ奇品には非ず。夫れ、わが愛する錦葉銀樹(ふいりもの)さへぎへとして、白きは月の下(もと)の花にも勝りまた時しらぬ雪かと訝り、斑爛帯紅(べにかけふ)の紅(くれない)なるは未だき秋の紅葉(もみじ)をみす。筆も及ばぬ葉形変(はがたがわり)、砂子、黄斑、黄金色(おうごん)に至るまで天生の麗しき質(もちまえ)にして人作の能する所に非ず。斯の珍品奇種(めずらしきもの)誰が愛重せざらんやと。問う人この答えに感伏してたち

まちこの門に入って好人となる。朝比奈、初鹿野の二氏(ふたじ)これなり。今好人の盛なる此人びとを以て拙攻(はじまり)とす。

【現代語訳】

永島先生は江戸の四谷に住んで享保の頃の人である。生まれつき園芸を好み、奇品を愛していた。始めは、植物を花壇に植え、仕切りをもうけて露地植えで仕立てたものをあとから器に植えかえ、壺木と呼んだ。永島先生は、尾張国瀬戸のやきもの業者に発注して、最初の植木鉢を作らせた。この植木鉢を先生は縁付(えんつき)と名付けた。今日、白鍔鉢、黒鍔鉢と呼ばれている植木鉢がこれにあたる。使って便利なことだから今では広く普及しているところである。この頃より奇品が大いにはやり、趣味家の同好会ができた。世間の人たちは奇品の最高権威者として敬意を込めて永島先生と呼んでいる。これが今盛況をきわめる永島連である。奇品植物は実際のところ永島先生を中興の祖とするのである。先生が栽培する奇品植物の数は千鉢にもなる。養生と水やりに余念がなく、まさに老いることを知らないようである。或る人が「先生はかの有名な兼好法師の徒然草を読まないのですか？」と問いただしたところ、先生は笑いながら「資朝卿(すけともきょう)が雨やどりしてお捨てになったのは、今、私たちが珍重する奇品植物とは別のものだ。ほら、私の愛する斑入り植物は葉の色が鮮やかで、白斑のものは月夜のもとの花にも勝り、また、季節外れの雪かと疑いたくなるほど白く、紅かけ斑の紅色は秋に

なる前に紅葉(もみじ)を見せる。筆も及ばないほど見事な葉形変(はがたがわり)、砂子、黄斑、黄金色(おうごん)にいたるまで、生来の麗しい性質であって、人間の能力の及ぶところではない。このような尊い植物をいったい誰が愛重しようとしなないことがあろうか」と答えた。

問う人はこの答えに感服してすぐさまこの門(永島連)に入り奇品家となった。これは、朝比奈、初鹿野の両氏のことである。このあと奇品家は続々と増えていったのだ。

【注釈】

徒然草

徒然草第百五十四段。「この人、東寺の門に」からはじまる。

『徒然草』は兼好法師が鎌倉末期に書いたとされる日本三大随筆のひとつ。

資朝卿

日野資朝 (1290～1332)。

鎌倉末期の公卿。儒学者。茶人。

朝比奈・初鹿野

永島先生の門人で最古参。朝比奈は唐むろの発明者として知られ水野忠暁の鉢植えの師でもある。

徒然草 第一百五十四段

【原文】

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたは者どもの集りあたるが、手も足も振ぢ歪み、うち反りて、いづくも不具に異様なるを見て、とりどりに類なき曲物なり、尤も愛するに足れりと思ひて、目守り給ひけるほどに、やがてその興尽きて、見にくく、いぶせと覚えければ、ただ素直に珍らしからぬ物には如かずと思ひて、歸りて後、この間、植木を好みて、異様に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なく覚えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘り捨てられにけり。さもありぬべき事なり。

【現代語訳】

この人(日野資朝)が東寺の門で雨宿りをなさっていたときに、身体に障害をもつ乞食の群れがいた。手も足もねじ曲がり、反り返り、いずれも変形していたが、その様子を見て、「どれも変わった奇品だ。興味深いものだ」と、観察なさっていたが、やがて興味がなくなり、醜く、不快に感じられて「ふつうの体の人間のほうが良い」と思った。家に着いたあと、「近ごろ、鉢植えに夢中になり、自然に逆らってくねくねと曲がった木を見て喜ぶのは、あの乞食どもを良いと思うのと同じことだ」と気づき、いっきに興がさめたので、鉢に植えられていた樹木をきれいさっぱりお捨てになった。もったもなことである。

【解説】

『草木奇品家雅見』は青山の植木屋繁亭金太が編集して文政 10(1827)年に刊行された江戸時代の奇品植物図譜である。過去から文政当時に活躍していた江戸の著名な奇品家 108 名の略伝と約 500 点の奇品植物の挿画を収録している。奇品家の伝記は金太の師で『草木錦葉集』(1829)の著者でもある奇品家の水野忠暁(ただとし)(1767～1834)が執筆した原稿をそのまま掲載した。

永島先生は、四谷に住み、江戸中期の享保(1716～36)のころの人である。本名と職業は明らかではない。幕臣の諸家譜である『寛政呈書』(1799)には四谷内藤宿新屋敷六軒町に住む永島氏の記載があり、享保当時の当主は墨林(すみもと)であった。『草木奇品家雅見巻之一』に「桜井出いぶき」などの奇品の出所として紹介されている旗本の桜井栄久(1713～1798)は永島氏と同じ地区に屋敷があり、栄久の母が墨林の娘であることから、永島氏と桜井氏は親戚関係にあったことがわかる。栄久らが師と仰ぐ永島先生は、墨林の息子で、栄久の叔父である恭林(ゆきもと)(?～1774)であると断定したい。

永島先生は幼少期から園芸を趣味とし、とくに変わった植物を好んだという。永島先生は、はじめに露地植えで育てた木をあとから器に植え替える壺木(つぼぎ)という仕立て方法を考案し、縁付(えんつき)と称する植木鉢をみずからデザインして瀬戸で生産させた。縁付鉢は縁の部分が外側に反り返り「鏝」のような形をしていることから、白鏝鉢、黒鏝鉢とも呼ばれている。大小 5 種類の縁付鉢を入れ子状に積み重ねると持ち運び

にも便利で、大量生産が可能であることから江戸をはじめ各地で使用された。先生のもとには多くの好人が集まり、のちに永島連に発展していく。江戸ではじまった奇品植物はやがて全国に広がり、奇品植物の流行がはじまった。

鉢植えは平安時代のころ中国から伝えられた外来文化である。平安時代から江戸初期までの鉢植えは、中国の盆景そのままに、舟形の石台(せきだい)や水盤もしくは浅い陶磁器の植木鉢にマツやウメなどの樹木を植えつけ、石とセキショウなどの下草をあしらう形式が定番であった。平安末期の絵巻には貴族の邸宅の鉢植えが立身出世のステータスシンボルとして描かれている。室町時代に京都でサクラ、ツバキなどの花木園芸がさかんになり、江戸初期から中期にかけて、江戸でツツジ、カエデ、シャクヤク、キク、マツモトセンノウなどの日本独自の園芸品種が作られた。いっぽう、仕立てるのに技術を要し、露地植えの花木や宿根草と比べて管理に手間がかかる鉢植えは、江戸初期まで日々の暮らしに追われる一般庶民が積極的にかかわるものではなく、隠者の慰みものであるとみなされてきた。中国の盆景の形式から脱却し、樹形にはこだわらずに植物のありのままの自然な姿を鑑賞する現在のようなスタイルの鉢植えを作り、庶民のあいだに広まるきっかけを作ったのは永島先生の師である榊原十太や山角らであった。

江戸中期の享保期は江戸文化がもっとも華やかに開花した時代である。文化の中心地が京都から江戸に移り、庶民を担い手とした新しい時代の文化が興隆しはじめた。茶の湯、いけばな、書道、俳諧、算術、本草、鉢植えなどがそれにあたる。永島先生はこれ

まで誰も気づかなかった斑入りと葉変わり(葉形変わり)の植物に「美」を見出し、これまでになかった奇品植物という新しい価値観と美の世界を創造した先駆者であった。

斑入りと葉変わりの植物はなぜ奇品なのか。永島先生が斑入りと葉変わりの植物を奇品として珍重する理由とは何か。『徒然草』に、資朝卿が東寺で雨宿りをしてこれまで大切にしていた鉢植えの木をすべて捨てさせてしまったとあるのは、不自然にくねくねとねじ曲がった幹の盆樹である。異様ともいえる木姿にはじめは興味を覚えて育てていたのだが東寺で乞食を観察するうちに人も植物も生まれつきの素直な形のほうが良いことに気づかされた。永島先生が愛する奇品植物は、葉が白や黄、紅色の斑にいろどられる斑入り植物と葉形の変った植物であり、資朝卿が捨てさせた不自然に醜く変形した幹や無理に人が手を加えて曲げ縮めて矮小化した植物ではない。奇品植物は美しい性質をもって生まれてきた植物であるがゆえに貴重である。これを人間の手で作り出すことはできない。だから尊いと先生は力説する。

江戸時代に流行した奇品植物は中国にも西洋にもない日本独自の園芸文化である。奇品植物を最初に海外に紹介したのはシーボルトで、著書『日本植物誌』(1835~70)の覚書き部分に奇品を好む日本人の自然観の考察と『草木奇品家雅見』に関する記述がある。今日、斑入りや葉変わりの植物は世界中いたるところで栽培されている。永島先生は人類の文化を大きく前進させた功績があるといわねばならない。